

短期大学生におけるスマートフォンの使用状況に関する意識調査

Investigation in related to status of use for Smartphone in junior college student

渡部 琢也

Takuya Watanabe

近藤 城史

Narihito Kondo

田淵 哲明

Tetsuaki Tabuchi

目 次

- I. はじめに
- II. 方法
- III. 結果
- IV. 考察

I. はじめに

1990年代より本格的なネットワーク社会が進展し、ICT (Information and Communication Technology) の新たなイノベーション (Technological Innovation) が起こってきた。よって、各種のコンピュータ系端末はネットワークに接続されていることが当たり前となり、わたくし達はあらゆる情報通信機器による環境変化とその影響を受容せざるを得ない状況が続いている。それに伴いわたくし達の社会環境は、工業社会から情報化社会へとパラダイムシフト (Paradigm Shift) し、さらに情報社会へと移り変わろうとしている。ICTの発達の仕事や生活の上での様々な利便性を向上させ、わたくし達の暮らしを豊かにする一方で、人間の諸活動における各場面での関係性や作業手順に対する変化も要求してくる。つまり、より便利な環境へと移行するには通常はその代償が必要となり、それを受け入れられなければ新しい世界への道は開かれないのである。

代償となる要素としては、主にハードウェアとしての機器の導入や、それに伴うソフトウェアの導入による費用面の問題である。また、ハードウェアやソフトウェアの操作知識や各種機能を習得する時間と、それを身に付けるための心理的な忍耐も必要となる。しかし、それらの代償を受け入れ自分のものとして身に付けた人々は、新たな世界と利便性を手に入れることが可能となるのである。ICTの導入によってもたらされる効果としては、本来は多人数を必要としていた作業が軽減されるといった「省力化」、相当の時間を要する作業が短縮可能となる「時間短縮」、遠隔地とのコミュニケーションにおいて移動に時間を要することや移動可能な時間帯が制限されるということからの「制約開放」、そしてその移動に伴い消費するエネルギーやコストといった様々なものをカット可能になるといっ

た「付帯経費削減」といった点が挙げられよう。

さて、このように昨今の ICT の動向はめざましく、人間の行動パターンやコミュニケーションスタイルに徐々に変化をもたらしてきている。その中で最も身近で仕事や生活の上での影響を与える可能性があるモノの一つとして、情報コミュニケーションツールとしてのスマートフォン (Smartphone) が挙げられよう。また、スマートフォンより以前の情報コミュニケーションツールである携帯電話の浸透過程からみると、スマートフォンの浸透とライフサイクル上の視点からイノベータ (Innovator) やオピニオンリーダー (Opinion Leader) として最も期待されている層は若年女性層であることが想定される。

そこで、本学は短期大学で前身は名古屋女子商科短期大学ということもあり、男子学生の割合は約 8% (総合ビジネス学科では男子 10 人 / 全 135 人中) 以下で、そのほとんどが 18 歳から 20 歳までの女子学生である。よって、名古屋経営短期大学総合ビジネス学科ビジネス情報コースでは、昨年に引き続き継続的な学生におけるスマートフォンの利用実態調査を実施することで、スマートフォンの普及に視点を置いた経年変化を捉え、スマートフォンの普及実態、及びスマートフォンを利用する上での学生の意識を調査し、今後の情報系教育の方向性を探り、来るべき時代へのカリキュラムの準備とすべく分析と考察を行ったものである。また、スマートフォンの利用においては従来の情報コミュニケーションツールの端末である通常の携帯電話と比較し、利用者がアプリケーションの導入 (インストール) 過程や通常利用において、コンピュータウィルスに感染するリスクの割合が非常に上昇してきている。ゆえに、情報コミュニケーションツールを利用する上でのリスクに対する意識や、その対策状況についても調査を行った。

II. 方法

1. 対象

名古屋経営短期大学総合ビジネス学科、子ども学科、健康福祉学科の学生に対して、「携帯電話に関するアンケート調査」(資料参照)として、無記名でアンケート調査を行った。アンケート調査は、1 年生は情報リテラシー (総合ビジネス学科)、情報リテラシー I (子ども学科) および情報処理 (健康福祉学科) において、2、3 年生はゼミナールにおいて、2012 年 7 月 9 日(月)~19 日(木)の期間に実施した。名古屋経営短期大学の 2012 年 4 月 4 日現在の在籍者数は、総合ビジネス学科 1 年 61 名、2 年 76 名、子ども学科 1 年 45 名、2 年 46 名、3 年 28 名、健康福祉学科 1 年 31 名、2 年 40 名の計 327 名であった。

2. アンケートの質問項目

アンケートの質問項目は、「性別」、「学年」、「所属学科」、「1、スマートフォンを知っていますか?」、「2、スマートフォンを使っていますか?」、問 2 を「はい」と答えた場合に

は、購入年月、2台使用の有無、OSと端末そして前回調査のときの使用状況について質問した。以下の質問項目については、「大変そう思う」、「そう思う」、「あまり思わない」、「まったく思わない」の四択で回答を求めた。その質問項目は「3、スマートフォンを使ってみたいですか?」、「4、就職活動に役立つと思いますか?」、「5、短大学生活に役立つと思いますか?」、「6、卒業後、ビジネスで役立つと思いますか?」、「7、携帯電話のままでいいですか?」、「8、大学の情報処理の授業で使い方等の授業を受けたいですか?」、「9、大学の情報処理の授業でPCだけでなくスマートフォンについて授業を行うべきだと思いますか?」、「10、スマートフォンを2台目として使おうと思っている」、「11、アプリを使う(インストールする)ときに安全性(セキュリティー)を気にしていますか?」、「12、スマートフォンから情報が漏(も)れると自分だけでなく友人も被害にあう可能性を理解していますか?」であった。また、「13、スマートフォンは何に役立つそうですか?(自由にお書きください)」、「14、スマートフォンの何に魅力を感じますか?(自由にお書きください)」の2つの問いは自由記述で質問した。

3. 分析方法

四択の質問に関しては、「大変そう思う」を4、「そう思う」を3、「あまり思わない」を2、「まったく思わない」を1の4段階としてそれぞれの数を集計し、また統計値として平均値とばらつきを見るためにその標準偏差を求めた。自由記述に関しては、回答を分類して集計した。集計は一名の回答に対して、分類されている項目に当てはまるだけ複数カウントした。

III. 結果

名古屋経営短期大学の2012年4月2日現在の在籍者総数は327名であり、回収できたアンケート総数は総合ビジネス学科が92名、子ども学科が73名、健康福祉学科が50名の計215名であった。回収率は65.7%であった。

1. スマートフォンの認知度と利用割合について

第一に「スマートフォンを知っていますか?」と言う質問に対して、全体の95.3%の205名が「はい」と答え、4.7%の10名が「いいえ」と答えた(表1)。次に「スマートフォンを使っていますか?」と言う質問に対しては59.8%の119名が「はい」と答え、40.2%の80名が「いいえ」と答えた。使用しているOSはAppleのiOSが44.5%の53名、GoogleのAndroidが36.1%の43名、未回答が19.3%の23名であった(表2)。

表1 スマートフォンの認知度と利用割合について

			はい (1)	いいえ (2)
問1	スマートフォンを知っていますか？	N	205	10
		%	95.3%	4.7%
問2	スマートフォンを使っていますか？	N	119	80
		%	59.8%	40.2%

表2 スマートフォンで使用しているOSの種類割合について

	N	%
iOS	53	44.5%
Android	43	36.1%
未回答	23	19.3%

2. 四択の質問項目について

問3から問12までの回答の平均とその標準偏差を表3に、各質問項目に対する4段階の回答の人数を表4に示した。「3、スマートフォンを使ってみたいですか？」に対しては「大変そう思う (4)」は35.3%の76名、「そう思う (3)」は42.3%の91名、「あまり思わない (2)」は14.0%の30名、「まったく思わない (1)」は4.2%の9名であり、平均3.14±0.82 S.D (N=206)であった。「4、就職活動に役立つと思いますか？」に対しては「大変そう思う (4)」は28.8%の62名、「そう思う (3)」は48.8%の105名、「あまり思わない (2)」は19.1%の41名、「まったく思わない (1)」は2.8%の6名であり、平均3.04±0.77 S.D (N=214)であった。「5、短大学生活に役立つと思いますか？」に対しては「大変そう思う (4)」は28.8%の62名、「そう思う (3)」は41.4%の89名、「あまり思わない (2)」は25.6%の55名、「まったく思わない (1)」は3.7%の8名であり、平均2.96±0.84 S.D (N=214)であった。「6、卒業後、ビジネスで役立つと思いますか？」に対しては「大変そう思う (4)」は32.1%の69名、「そう思う (3)」は46.5%の100名、「あまり思わない (2)」は17.2%の37名、「まったく思わない (1)」は3.7%の8名であり、平均3.07±0.80 S.D (N=214)であった。「7、携帯電話のままでいいですか？」に対しては「大変そう思う (4)」は12.1%の26名、「そう思う (3)」は40.9%の88名、「あまり思わない (2)」は35.8%の77名、「まったく思わない (1)」は9.8%の21名であり、平均2.56±0.83 S.D (N=212)であった。「8、大学の情報処理の授業で使い方等の授業を受けたいですか？」に対しては「大変そう思う (4)」は13.5%の29名、「そう思う (3)」は30.2%の65名、「あまり思わない (2)」は45.6%の98名、「まったく思わない (1)」は9.8%の21名であり、平均2.48±0.85 S.D (N=213)であった。「9、大学の情報処理の授業でPCだけでなくスマートフォンについて授業を行うべきだと思いますか？」に対しては「大変そう思う (4)」は12.1%の26名、「そう思う (3)」は27.0%の58名、「あまり思わない (2)」は46.5%の100名、「まったく思わない (1)」は13.0%の28名であり、平均2.39±0.87 S.D (N=212)であった。「10、スマートフォンを2台目として使おうと思っている」に対しては「大変そう思う (4)」は3.7%の8名、「そう思う (3)」は17.2%の37名、「あまり思わない (2)」は43.7%の94名、「まったく思わない (1)」は32.6%の70名であり、平均1.92±0.81 S.D (N=209)であった。「11、アプリを使う (インストール

表3 平均値とその標準偏差

	問3	問4	問5	問6	問7	問8	問9	問10	問11	問12
平均	3.14	3.04	2.96	3.07	2.56	2.48	2.39	1.92	2.88	3.13
標準偏差	0.82	0.77	0.84	0.80	0.83	0.85	0.87	0.81	0.92	0.82
人数	206	214	214	214	212	213	212	209	208	210

表4 各質問項目に対する4段階の回答

		問3	問4	問5	問6	問7	問8	問9	問10	問11	問12
大変そう思う (4)	N	76	62	62	69	26	29	26	8	59	80
	%	35.3%	28.8%	28.8%	32.1%	12.1%	13.5%	12.1%	3.7%	27.4%	37.2%
そう思う (3)	N	91	105	89	100	88	65	58	37	82	82
	%	42.3%	48.8%	41.4%	46.5%	40.9%	30.2%	27.0%	17.2%	38.1%	38.1%
あまり思わない (2)	N	30	41	55	37	77	98	100	94	49	43
	%	14.0%	19.1%	25.6%	17.2%	35.8%	45.6%	46.5%	43.7%	22.8%	20.0%
まったく思わない (1)	N	9	6	8	8	21	21	28	70	18	5
	%	4.2%	2.8%	3.7%	3.7%	9.8%	9.8%	13.0%	32.6%	8.4%	2.3%
無回答	N	9	1	1	1	3	2	3	6	7	5
	%	4.2%	0.5%	0.5%	0.5%	1.4%	0.9%	1.4%	2.8%	3.3%	2.3%

する)ときに安全性(セキュリティー)を気にしていますか?」に対しては「大変そう思う(4)」は27.4%の59名、「そう思う(3)」は38.1%の82名、「あまり思わない(2)」は22.8%の49名、「まったく思わない(1)」は8.4%の18名であり、平均 2.88 ± 0.92 S.D (N=208)であった。「12、スマートフォンから情報が漏(も)れると自分だけでなく友人も被害にあう可能性を理解していますか?」に対しては「大変そう思う(4)」は37.2%の80名、「そう思う(3)」は38.1%の82名、「あまり思わない(2)」は20.0%の43名、「まったく思わない(1)」は2.3%の5名であり、平均 3.13 ± 0.82 S.D (N=210)であった。

3. 自由記述の質問項目について

自由記述に関しては、回答を分類して集計した。集計は一名の回答に対して、分類されている項目に当てはまるだけ複数カウントした。それぞれの回答については表5と表6に示した。それぞれの割合は複数回答を合計した。

「13、スマートフォンは何に役立ちそうですか?(自由にお書きください)」に対しては53%の113名から回答があり、複数回答の合計は142であった。回答を見ると最も多かったのが情報収集に役立ちそうという意見が26.1%の37名からあった。次に多かったのが様々な役に立つが22.5%の32名からあった。アプリが8.5%の12名、機能が7.0%の10名、就活が7.0%の10名、暇潰しが6.3%の9名、PCの代わりになるが5.6%の8名、インター

表5 問13「スマートフォンは何に役立ちそうですか？」に対する自由記述の答えの分類

	情報収集	様々役に立つ	アプリ	機能	就活	暇潰し	PC	インターネット	コミュニケーション
N	37	32	12	10	10	9	8	8	6
%	26.1%	22.5%	8.5%	7.0%	7.0%	6.3%	5.6%	5.6%	4.2%

表6 問14「スマートフォンの何に魅力を感じますか？」に対する自由記述の答えの分類

	アプリ	デザイン	タッチパネル	情報収集	機能	インターネット	PC	様々	利便性
N	46	24	12	10	9	9	7	5	4
%	32.9%	17.1%	8.6%	7.1%	6.4%	6.4%	5.0%	3.6%	2.9%

ネットにつながるが5.6%の8名、コミュニケーションの手段としてが4.2%の6名であった。表には記載していないが、遊びが3.5%の5名、わからないが同じく3.5%の5名であった。

「14、スマートフォンの何に魅力を感じますか？（自由にお書きください）」に対しては55%の119名から回答があり、複数回答の合計は140であった。回答を見ると最も多かったのがアプリで32.9%の46名であった。次にデザインの17.1%の24名であった。タッチパネルの8.6%12名、情報収集が7.1%の10名、機能が6.4%の9名、インターネットが6.4%の9名、PC5.0%の7名、様々が3.6%の5名、利便性が2.9%の4名であった。表には記載していないが、最先端が1.4%の2名、ゲームが0.7%の1名、カッコいいも同じく0.7%の1名であった。感じないが2.9%の4名、わからないも同じく2.9%の4名であった。

IV. 考察

1. アンケートに対する答えについて

スマートフォンの認知度については、「スマートフォンを知っていますか？」と言う質問に対して、全体の95.3の205名が「はい」と答え、4.7%の10名が「いいえ」と答えた（表1）。昨年の渡部と田淵の報告⁴⁾の95%に引き続き、2年続けて95%以上の結果から、「スマートフォン」という言葉は本学の学生においては、完全に認識されていることが示された。「スマートフォンを使っていますか？」と言う質問に対しては59.8%の119名が「はい」と答え、40.2%の80名が「いいえ」と答えた。約6割の学生がスマートフォンを使用しており、昨年の23%から倍以上の増加となった。また、未発表であるが2011年12月に総合ビジネス学科の1、2年生に対してアンケート調査を行った結果、約39%がスマートフォンを利用していた。本学においては約半年ごとに2割程度ずつスマートフォ

ンの利用が増えていることとなる。

使用している OS は Apple 社の iOS が 44.5% の 53 名、Google の Android が 36.1% の 43 名、未回答が 19.3% の 23 名であった（表 2）。昨年は iOS が 63% を占めており、Android は 25% であったが、10% 以上増加した。ただし、未回答が約 2 割であり、より正確な回答が得られるようにアンケートにも工夫が必要であると考えられる。また、iPad や iPod touch の利用が推察されるが、約 2 割が 2 台使用と回答した。

「10、スマートフォンを 2 台目として使おうと思っている」に対しては、そう思っている割合は 20.9% であり、前回の調査では 2 台使用は 36.6% であり、今回の調査で半減した。前回はスマートフォン利用者の約半数が 2 台使用であった。昨年の段階では、スマートフォンへの不安要素がまだ多いこと（端末機に対する不安や料金体系に対する不安）や Apple 社の iPhone に人気があったが、iPhone が特定の通信会社のみでの取り扱いであり、今までの携帯電話と iPhone の同時利用があったことが推察される。

2. 短期大学生のスマートフォンに対する意識

「3、スマートフォンを使ってみたいですか？」に対しては、77.6% の学生が使ってみたいとの考えを持っている。やはり、多くの学生がスマートフォンを使ってみたいとの考えを持っていることがわかった。「4、就職活動に役立つと思いますか？」に対しては、77.6% の学生が就職活動に役に立つと考えており、「5、短大学生活に役立つと思いますか？」に対しては、70.2% の学生が短期大学生活に役立つと思っているとの結果であった。「6、卒業後、ビジネスで役立つと思いますか？」に対しては、78.6% の学生が卒業後、ビジネスで役立つと考えている結果であった。4 つの問いにおいて「大変そう思う」と回答した割合は全てにおいて前報と比較して 10% 程度の増加が示された。利用率が上がったことから推察すると実際に使用して役に立っているという実感があることが伺える。

3. 携帯電話とスマートフォン

「7、携帯電話のままでいいですか？」に対しては、53% が携帯電話のままでよいと考え、45.6% は携帯電話のままでよいと思っていない事がわかった。スマートフォンの利用率が 59.8% であることから推察すると現在、スマートフォンの出荷率が約 7 割との報道と併せて考えると携帯電話のままでよいがスマートフォンに変えざるを得なかった学生がいることが伺える。今回のアンケート調査結果からも、今後更にスマートフォン化されることは避けられないが、一方で携帯電話に対するニーズもあることが明らかとなった。今後は、携帯電話は高齢者向けのみが残ると思われたが、携帯電話において日本メーカーが独自に開発した機能が根強い人気が続いている一面も伺える。ガラケー（ガラパゴス携帯電話）と言う言葉も定着していることからこれらの今後の動向が注目される。

4. スマートフォンに対する捉え方

自由記述の質問項目の「13、スマートフォンは何に役立ちそうですか？」に対しては、最も多かったのが情報収集に役立ちそうであった。次に様々な役に立つであり、この二つで5割近くを占めていた。前回の調査ではなかったが、本調査では暇潰しとコミュニケーションの手段としてという記述があった。今回の結果は実際にスマートフォンを使用していく中で、情報収集したり、様々な事に利用して、役に立ったという実感が反映された結果ではないかと考えられる。一方で様々なアプリを利用することで、空いた時間に使用する機会が増え、暇つぶしという記述が表れてきたと考えられる。またソーシャル・ネットワーキング・サービス（SNS）の利用の普及などによってコミュニケーションの手段としてスマートフォンを利用する機会が増えた事が考えられる。しかしながら、暇つぶしとは捉えているものの遊びとは捉えていないことも明らかとなった。

「14、スマートフォンの何に魅力を感じますか？」に対しては、最も多かったのはアプリであった。スマートフォンで使用するアプリケーションのことをアプリと表現するのはもはや一般的なものとなったと理解できよう。携帯電話と最も大きく異なる点は自分の必要なアプリをインストールして、使用することであろう。一方、次項で取り上げるが無料ソフトを装ったウイルスソフトについてさらに警戒していく必要があると考えられる。そして次にデザインについてであり、アプリと合わせて自機をカスタマイズしていくことへの喜びがさらに増していくことになると予想される。

5. セキュリティー

「11、アプリを使う（インストールする）ときに安全性（セキュリティー）を気にしていますか？」に対しては、65.5%がアプリをインストールする際にセキュリティー面を気にしていることが分かった。また、「12、スマートフォンから情報が漏（も）れると自分だけでなく友人も被害にあう可能性を理解していますか？」に対しては、75.3%が他人にも迷惑がかかってしまう可能性について理解をしていることも分かった。一方でそれぞれ31.2%と22.3%があまり気にしていない実態も明らかとなった。さてわたくし達は、ここでこの結果をどのように捉えるかが、高等教育機関で果たす重要なポイントであると考えられる。まず、セキュリティー面における数値結果の正直な感想は、初等中等教育や短期大学入学以降の情報倫理的な教育の成果が出ているものと判断できる。とくに意識面での結果といえる、「12、スマートフォンから情報が漏（も）れると自分だけでなく友人も被害にあう可能性を理解していますか？」に対する、75.3%が他人にも迷惑がかかってしまう可能性について認識をしている点である。一方で、「11、アプリを使う（インストールする）ときに安全性（セキュリティー）を気にしていますか？」に対する結果の、65.5%がアプリをインストールする際にセキュリティー面を気にしているという結果は、いぜんアプリケーション自体の利用方法に関する知識はあるものの、コンピュータ本来のハードウェア

と OS (Operating System)、そしてアプリケーションおよび通信ネットワークとの関係理解が浅いためにリスクの認識が不足しているものと考えられる。いずれにしても、セキュリティ意識の低い 31.2%と 22.3%を限りなく 0%に近づけていく教育と努力が必要であろう。

6. 大学における情報リテラシー教育

「8、大学の情報処理の授業で使い方等の授業を受けたいですか？」と「9、大学の情報処理の授業で PC だけでなくスマートフォンについて授業を行うべきだと思いますか？」に対しては、肯定的な回答がそれぞれ 43.7%と 39.1%であり、否定的な考えが 55.4%と 59.8%であった。スマートフォンは携帯電話も同様であるが、機種によって操作方法が若干異なり、メニューも同様に異なる。現実的には大学の授業でしっかりと取り組むことは難しいかもしれないが、本年度から本学では情報関連の授業において、SNS を含めて部分的にスマートフォンの使用を始めた。また、KEIEITAN ボランティア隊として、平成 24 年 9 月に東日本大震災の被災地域において復興ボランティアを実施した⁵⁾。その際に、大学で行われていたオープンキャンパスにおいて、遠隔地とのネットワークコミュニケーションとして、映像と音声にて、被災地とインターネットを経由して通信を行った。参加の高校生からは参加アンケートに興味深い内容として受け止められたことが記載されていた。近年では、情報処理科目でコンピュータを利用するだけでなく、他教科でもコンピュータ的な考え方を活用する“Computational Thinking”を取り入れるべきとする議論もある。“Computational Thinking”とは、Communications of the ACM, March 2006⁶⁾で発表された、コンピュータを扱う専門家だけでなく、万人が活用できるコンセプトである。古くから初等教育における基本的な教育内容として「読み・書き・そろばん」とされてきたが、それらに次ぐスキルセットとして注目されている。現代の複雑化された情報社会における問題解決には、問題分割と抽象化が必要不可欠である。さまざまな問題を分解し、抽象化する。そこからある一定のパターンを見出し一般化して、本質を見抜く力を見付ける。単なるハードウェアとしてのスマートフォンの操作方法や、アプリケーションソフトの利用方法だけでなく、このような思考能力を情報リテラシー教育の中で養っていく時期に来ているのかも知れない。今回の調査において、二つの質問に対する回答が昨年とほぼ同様であることから、本学の学生はスマートフォンを大学の授業として学ぶという意識は依然として低いようである。しかしながら、前報でも論じたが、スマートフォンは多機能携帯電話と定義されるが、今回の調査からも利用率が増え、PC との垣根がさらにいっそうなくなる方向に進むと予想される。よって我々大学の情報リテラシー教育に携わる教員としては、この 10 年間ににおいても大きく変化してきたが今後の社会的な動向も含めて大学教育における情報リテラシー教育の在り方についてもさらに継続して議論していくことが求められる。

7. スマートフォンの今後について

昨年度は「スマートフォン普及元年」と言われていたが、今年度はスマートフォンの普及がさらに進み、各メーカーからの携帯電話の出荷の約7割がスマートフォンと報道されている。従来の携帯電話は子どもや高齢者向けの機能に限定した簡易型の携帯電話のみが残っていくと推測されたが、高齢者向けのスマートフォンも発売され、さらに市場を広げていく戦略がとられている。一方で、日本国内では携帯電話において日本メーカーが独自に開発した機能に対して根強い人気があり、アンケート結果からも携帯電話がいいと思っている層がいることも明らかとなったことから、今後どのような流れになるのかその動向が注目される。そして、タブレット型の普及も促進し、さらにPCとの垣根がなくなる方向に進むことが予想される。そのような現状において、アメリカの調査会社によれば、2013年にはタブレット型端末の出荷台数がノートパソコンを上回るとの予想を示している。

スマートフォンの利用拡大にもあり、急速に利用が増えているSNSについては、ユーザー数が多く有名なサイトとして、日本国内に特化したニックネーム、匿名で利用されているサイトと、アメリカでサービスが開始され急速に利用が拡大した実名主義のサイトがある。また、1回あたり入力文字数が百四十文字以内の日本語では「(鳥の) さえずり」と訳されるSNSは入口のメディアとも表現され、投稿文を読む登録者はフォロワーと呼ばれ、利用者同士がお互いの承認なく簡単に結びつき人から人へと書き込みを拡散する力が大きいとされる。そしてスマートフォンのアプリとしてスタートした、人と人を線でつなぐという思いが込められているアプリケーションの特徴は喜怒哀楽などの豊かな感情表現ができる点である。新しい機能が追加され、SNSとして利用できるようになった。最近登録ユーザー数が1億人を突破したと報道され、「首相官邸」の公式アカウントも開設されている。東日本大震災をきっかけに、安否確認や情報の交換の重要性の認識もさらに高まり、新しいコミュニケーションインフラとしても注目されている。先にも述べたように本学では情報系の授業において、SNSの利用も行っている。また、ゼミやクラブ・サークルにおいても、我々と学生とのやり取りや学生間もメールではなくここで述べたSNSの利用が増加していると実感している。今後、我々は学生も含めてSNS利用がさらに増し、そして重要度も高まってくるであろうと予想される。大学のリテラシー教育においても適切な利用法も含めて取り上げていく必要が推察される。

謝辞

今回のアンケート調査に際しましてご協力いただいた学生諸君および総合ビジネス学科、子ども学科、健康福祉学科のゼミナール担当の先生方に対して感謝いたします。記して謝意を表わす次第である。

文献

- 1) 株式会社情報通信総合研究所編『情報通信アウトルック 2012 スマート化する社会』NTT 出版 2011年
- 2) 長橋賢吾『スマートフォンビジネスモデル』秀和システム 2012年
- 3) NTT ドコモ モバイル社会研究所編『モバイル・コミュニケーション 2012-13』中央経済社 2012年
- 4) 渡部琢也・田淵哲明『短期大学生におけるスマートフォンに対する意識調査』名古屋経営短期大学紀要 53 23-32 2012年
- 5) 近藤城史・渡部琢也『KEIETAN ボランティア隊震災復興ボランティア活動報告』名古屋経営短期大学紀要 54 45-58 2013年
- 6) <http://www.cs.cmu.edu/~wing/publications/Wing06.pdf>

資料

「携帯電話」および「スマートフォン」に関するアンケート調査

総合ビジネス学科：田淵，渡部，近藤

学生の皆さんの携帯電話、およびスマートフォンに関する利用実態のアンケートにご協力をお願いします。
なお、調査内容は今後の大学での情報系教育の内容を検討していくための参考資料とさせていただきます。

性別： 男 ・ 女 学年： _____ 学科： 総合ビジネス ・ 子ども学科 ・ 健康福祉学科

- 1、スマートフォンを知っていますか？ はい ・ いいえ
- 2、スマートフォンを使っていますか？ はい（ 年 月購入）・ いいえ いいえの方は問い3へ
はいの方は続けて以下の問いにお答えください
 - ・ 2台使用している（1台は携帯電話、2台目がスマートフォンまたはアップルの iPod touch など含む）
はい ・ いいえ : はいの方は具体的に:スマートフォン、iPod touch など()
 - ・ スマートフォンを現在使っている方? : iOS (iPhone) ・ Android ・ その他()
 - ・ 使っている端末は? : 携帯電話型 ・ タブレット型 (iPod など) ・ その他()
 - ・ 前回調査のとき（1年生は昨年7月）にスマートフォンを使っていましたか? : はい ・ いいえ
- 3、スマートフォンを使ってみたいですか?（現在使用している方もお答えください）
大変そう思う ・ そう思う ・ あまり思わない ・ まったく思わない
- 4、就職活動に役立つと思いますか?
大変そう思う ・ そう思う ・ あまり思わない ・ まったく思わない
- 5、大学生活に役立つと思いますか?
大変そう思う ・ そう思う ・ あまり思わない ・ まったく思わない
- 6、卒業後、ビジネスで役立つと思いますか?
大変そう思う ・ そう思う ・ あまり思わない ・ まったく思わない
- 7、携帯電話のままでいいですか?
大変そう思う ・ そう思う ・ あまり思わない ・ まったく思わない
- 8、大学の情報処理の授業で使い方等の授業を受けたいですか?
大変そう思う ・ そう思う ・ あまり思わない ・ まったく思わない
- 9、大学の情報処理の授業でPCだけでなくスマートフォンについて授業を行うべきだと思いますか?
大変そう思う ・ そう思う ・ あまり思わない ・ まったく思わない
- 10、スマートフォンを2台目として使おうと思っている（現在2台使用している方もお答えください）
大変そう思う ・ そう思う ・ あまり思わない ・ まったく思わない
- 11、アプリを使う（インストールする）ときに安全性（セキュリティー）を気にしていますか?
大変そう思う ・ そう思う ・ あまり思わない ・ まったく思わない
- 12、スマートフォンから情報が漏れると自分だけでなく友人も被害にあう可能性を理解していますか?
大変そう思う ・ そう思う ・ あまり思わない ・ まったく思わない
- 13、スマートフォンは何に役立ちそうですか?（自由にお書きください）

- 14、スマートフォンの何に魅力を感じますか?（自由にお書きください）